



筑紫女学園大学リポジット

Categorical Approach to “NP1 no NP2” in Japanese

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 隆文, OGATA, Takafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/77

「NP1 の NP2」のカテゴリー分析

緒 方 隆 文

Categorical Approach to “NP1 no NP2” in Japanese

Takafumi OGATA

1. はじめに

「NP1のNP2」の表現は、クオリア構造を使った Generative Lexicon の分析、「の」を韓国語や中国語の対応表現と比較する研究、ガ格・ヲ格など連用から連体への転換から見た研究など、いろいろな視点で研究がなされてきた。しかしこの表現の研究で避けて通れない問題が、意味による分類である。この表現の意味が多様に富むことから、明確な判断基準でもって分類されることなく、単に意味およびその特性の列挙にとどまる研究も多かった。意味の数も研究者によって定まらず、新たな意味が見いだされれば、それを追加する以外ない状況にある。

そこで本稿はカテゴリーの視点から、「NP1のNP2」の表現を考察したい。そもそもこの表現は何らかの関係を持つNP1とNP2を結びつける表現である。しかしそこには方向性がある。NP1が参照点となって、NP2へと焦点が推移すると考える。この焦点推移が、カテゴリー内でどのように起こるかで分類を行い、それらの特性を示すことが本稿の目的となる。結論を述べれば、「NP1のNP2」は、大きく4つに分けられ、細かくは10に分けられる。この大きな分類は、カテゴリーおよび変項をもとにしたもので固定しており、増減することはない。

以下、2節では「NP1のNP2」の多様性と本稿でのカテゴリーの考え方を示し、3節では単一カテゴリー推移、4節では複合カテゴリー推移、5節では「NPの」の表現の多重共起について見ていく。

2. 「NP1のNP2」の多様性とカテゴリー

2.1 「NP1のNP2」の意味の多様さと曖昧さ

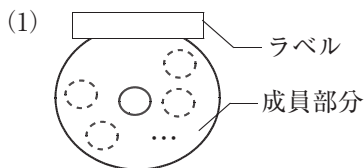
「NP1のNP2」には、多様さと曖昧さがある。多様さとは、この表現がきわめて多くの意味を

もつことにある。島津他(1986)では大きく5分類、細かく86分類に意味の観点から分けている。研究者によって分類の数は異なるが、この表現が持つ意味、言い換えれば、NP1とNP2の関係がきわめて多様であることを示している。一方曖昧さとは、一つの表現が複数に解釈される可能性があることをさす。西山(2003:16-17)の例を借りれば、「洋子の首飾り」は、《洋子の所有している首飾り》《洋子が身につけている首飾り》《洋子が手にしている首飾り》《洋子の製作した首飾り》《洋子が買ったがっている首飾り》など、多くの解釈が可能である。むろんコンテキストにおいて一つの解釈が選択されるが、一つの表現に一つの意味が結びついているわけではない。

この2つは分けて考えなければならない。前者の多様性は「NP1のNP2」が持つ意味であり、それを含む文脈と切り離して考えることができる。一方後者の曖昧さは、文脈が関わる話である。「NP1のNP2」はその意味が多様であるがゆえに、表現によっては複数の解釈の可能性がでる。通常の意味があったとしても、コンテキストによって違う意味になることは普通におこる。しかしコンテキストによる複数の解釈を認める度合いは、個々の表現によって異なっている。例えば「唐揚げの揚げたて」などはコンテキストに影響されにくい。一方上であげた「洋子の首飾り」では多様な解釈の可能性がある。本稿では、前者の多様性を中心に考察していく。この表現は研究者によって、様々な分類が行われてきた。しかし明確な基準がなく分類されているものも多い。そのため本稿では、カテゴリーの観点から、統一的に「NP1のNP2」の生成プロセスを考察し分類していく。そのために本稿のカテゴリーの考え方を次節でみる。

2.2 カテゴリーの構造

本稿では、次のようにカテゴリーを考えていく。カテゴリーは境界を持ち、他と区別される〈集合体〉と考える。そのため広く認知されているものから、その場限りの一時的なものまでである。またカテゴリーの境界は曖昧で固定しておらず、文脈などにより、その境界は広がったり狭くなったりする。つまり固定した境界など存在しない。さらに個体であっても様々な成員(属性)を持つと主観的にみなされるとき、カテゴリーとみなしていく。カテゴリーは基本、カテゴリーラベル(以下ラベル)と成員部分から構成される。



カテゴリーの中身、成員部分は大きく2つに分けられる。成員が、個体の場合と、属性の場合である。犬を例にとると、「たくさんの犬がいる」の犬は、個体成員の集合体である。「犬と猫は全然違う」の犬は、属性の集合体である。1つのカテゴリーを見るとき、どちらかひとつの見方をとる。「NP1のNP2」表現でも、カテゴリーは個体成員を含む場合と、属性成員を含む場合のどちらかに属することになる*1。

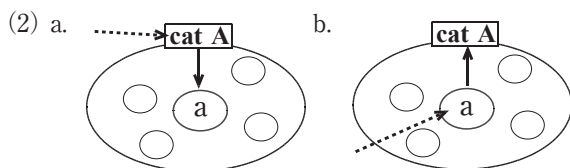
2.3 「NP1のNP2」とカテゴリー

「NP1のNP2」では、NP1を参照点としてNP2に焦点が推移すると考えられる*²。この焦点推移が、カテゴリーでおこると本稿は考える。カテゴリーは1つのことも、複数(通例2つ)のこともある。単一カテゴリーで推移が起こるものを「単一カテゴリー推移(Single Category Shift)」、複数カテゴリーで推移が起こるものを「複数カテゴリー推移(Plural Category Shift)」と呼ぶことにする。

単一カテゴリー推移では、一つのカテゴリー内で、カテゴリーラベルと成員間で推移が起こる。これには2種類あり、一つはカテゴリーラベル(以下ラベル)〈NP1〉から、成員〈NP2〉への推移がある(タイプA)。もう一つは成員〈NP1〉からラベル〈NP2〉への推移がある(タイプB)。一方複数カテゴリー推移では、変項があるかないかで分けられる。変項とは、値の定まっていない成員を指す。一つのカテゴリーに変項がある場合、もう一つのカテゴリーの成員がその値となり、意味が完結する。この変項があるタイプをタイプC、変項がないタイプをタイプDとする。よって「NP1のNP2」の表現は大きく、この4つに分類されることとなる。むろんこの4タイプからさらに細分されたパターンがあるが、基本この4種類と考えていく。以下、一つずつタイプを見ていくこととする。

3. 単一カテゴリー推移(Single Category Shift)

「NP1のNP2」では、NP1が参照点となり、NP2に推移する。単一カテゴリーの場合、(2)に示すように、cat Aのラベルと成員のどちらかが参照点となる(以下カテゴリーをcatと略記していく)。(2a)では、cat Aのラベルが参照点となり成員 a に推移しており、(2b)では成員 a が参照点となり、cat Aのラベルに推移している。(2a)タイプをタイプA、(2b)タイプをタイプBと呼んでいく。



(2a)の例として、家の窓、20ページの3行目などがある。(2b)の例として、バラの木、バラの花、梅の花などがある。いずれにせよ単一カテゴリーにおけるNP1とNP2の関係は、同一カテゴリー内のラベルと成員の関係になる。このとき両者の関係は、1. 全体と部分の関係、2. 種と類の関係などがある。これはメトニミーおよびシネクドキの関係と似ている。2つの比喩表現においては、ラベルか成員のどちらか一つが表現されるが、「NP1のNP2」では、ラベルも成員も両方が現れる。以下タイプAとタイプBについて、節を分けて見ていく。

3.1 タイプA: [ラベル] から [成員] への推移(2a)

カテゴリーのところで見たとように、成員は個体成員の場合と属性成員の場合がある。成員が個

体成員の場合をタイプA1、属性成員の場合をタイプA2とする。

3.1.1 タイプA1：[ラベル] から [個体成員] への推移

まず個体成員のタイプA1から見ていく。(3)では、全体と部分を表している。全体を表すNP1を参照点として、部分となるNP2にたどり着く形になる。部分となる成員が、個体成員になっている。

(3) 家の窓、エリザベス号の客室、20ページの3行目 [ページ内の場所]、フランスのパリ [都市]、3の2 [クラス名] 等

このタイプA1には、西山(2003)の [時間領域NP₁における、NP₂の指示対象の断片の固定] に分類される(4)のような例も入ると考える。これらはNP1に時間領域を表すものが来て、その領域内にNP2がいることを示す例になる。

(4) 東京オリンピック当時の君、着物を着た時の洋子、大正末期の東京、仕事に没頭しているときのあいつ (西山 2003: 31)

このとき、時間領域というカテゴリーの中に、NP2が成員として存在していると考えられる。というのも時間領域は単なる参照点として働いているのではなく、時間領域が持つ典型的な属性は、成員となるNP2に強く関わっている。喩えるなら、漬物樽に漬け込んだきゅうりのように、時間領域という樽の中で、その影響を強く受けられていると考えられる。それと同時に成員同士もまた互いに影響を及ぼし合っている。そのため時間領域とNP2は、集合と部分の関係と見なしていく。

3.1.2 タイプA2：[ラベル] から [属性成員] への推移

次に成員が属性成員になるタイプA2を見ていく。(5)のように、NP2が、NP1の属性を述べる形をとる。NP1は個体カテゴリーになることが多い。個体カテゴリーは、それ自体が個体になっているもので、成員は基本的には属性になる。個体カテゴリーが全体を表し、その属性NP2が、部分を表している。

(5) 太郎の賢さ、血の赤色(が目立っている)、猫のジャンプ力、ナイフの切れ味、…

また鈴木(2002: 43)が言う累加型の例に(6)のような表現がある(累加型すべてがこのタイプには入らない)。これらはNP1の典型的属性をNP2で明記することで、その状態を強調する表現となっている。これらも属性成員がNP2に来ていることから、タイプA2になる。

(6) あたりそこねのポテポテ、揚げたてのアツアツ、江戸前のこってり、…

これに類する表現に、寺村(1991: 249)があげる(7)のような例がある^{*3}。対象者に対して、否定的内容を直接訴えるような場面などで使われる。

(7) a. おねえちゃんのバカ, b. 太郎の嘘つき

しかしこれはタイプA2ではなく、複数カテゴリー推移に属すると考えられる。というのも変項が含まれているからである。(7a)でいえば「おねえちゃんはバカだ」と言い換えられる。これは「おねえちゃんは何かといえば、バカである」と述べており、この中には「何か」という変項

が含まれている(変項については後述)。つまり属性にバカがあるのではなく、属性がバカに相当すると叙述する表現になっている。よってこの構文はタイプA2ではなく、後述する複数カテゴリー推移のタイプC2に属する。

なお(8)の例は、(7)と表現は似ているが、(6)と同様に属性を述べているため、タイプA2になる。(8) 賭け事のためにまた借金したみたいよ。いつまでたっても父のバカは直らないねえ。

ここでは父の属性として、バカそのものが含まれている。ここには属性は〈何か〉という、という変項が含まれていない。そのため(7)と異なり、タイプA2になる。

さらに属性には、間柄を明記するものもある。(9)ではNP2に間柄を表すものが現れている。NP2に属性を明記することで、その属性を強調している。これも全体と属性成員の関係になる。

(9) 太郎のおにいちゃん、佐藤のだんな、鈴木の子貴、…

「太郎のおにいちゃん」は、太郎=おにいちゃんの関係になっている。つまり言い換えたような形になっている。「おにいちゃん」だけでもいいのだが、どのおにいちゃんかを特定するために、太郎が参照点としてNP1に現れている。

3.1.3 タイプA3：[ラベル] から [サブカテゴリー成員] への推移

最後に、種と類の関係になるタイプ、タイプA3を加える。ここでは成員がサブカテゴリーになっている。三宅(2011:86)が「主要部前置型」とあげた(10)のような例がある。

(10) a. シェークのバニラ, b. 牛丼の大盛り, c. にぎりの特上, d. ジョニーウォーカーの黒,
e. バランタインの17年もの, f. カローラの1500cc, g. メキシコ製グローブの8オンス,
h. サラブレッドの牡 (三宅 2011:86)

NP2は、NP1のサブカテゴリー(種類)になっている。(10a)のシェークで言えば、バニラ、チョコレート、ストロベリーなどの種類か述べる表現となっている。NP1を参照点として、サブカテゴリーのNP2に焦点が推移している。

これらには、NP1とNP2の表現を入れ替えた表現もあるが、基本これらはタイプA3ではない。

(11) a. バニラのシェーク, b. 大盛りの牛丼, c. 特上のにぎり, d. 黒のジョニーウォーカー,
e. 17年もののバランタイン, f. 1500ccのカローラ, g. 8オンスのメキシコ製グローブ,
h. 牡のサラブレッド (三宅 2011:86)

(11b)で考えれば、大盛りというカテゴリーの中から、牛丼というサブカテゴリーが選ばれている訳ではない。牛丼の状態が大盛りであることを述べている。そのためこれらは複数カテゴリー推移の例になる(後述するタイプD2)。ただし(11)の形であっても、NP2がサブカテゴリーと見なされれば、タイプA3に属する。たとえば(11h)の「牡のサラブレッド」で、牡のリストに、サラブレッドとそれ以外が細分されているとする。この場合、サラブレッドはサブカテゴリーになるため、タイプA3となる。しかし牡がサラブレッドを叙述しているとみなせば、複数カテゴリー推移の例になる。

次に述語相当語句がラベル(NP1)になって、その成員がNP2に現れるものがある。これは島津

他(1986)のケース4の一部に相当するもので、成員(NP2)は対応する動詞(+スル形)の義務的な項ではなく、付加詞に相当する部分になる。ここでもNP1が参照点となり、NP1に関連するゆるやかな集合体の成員(NP2)に焦点推移する形をとる。

- (12) 結婚の目的、通学的手段、開始の時刻、出発の空港、料理の材料、… (島津他 1986: 264)
一方、義務的項が現れる場合は、述語相当語句がNP2に現れ、変項(x)を含みもつため、複数カテゴリー推移のタイプになる(後述のタイプC1)。

3.2 タイプB: [成員] から [ラベル] への推移(2b)

[成員]から[ラベル]へ推移するタイプBを見ていく。成員(NP1)が参照点となり、ラベル(NP2)に推移する。タイプAと同様に、成員の種類により3つに分けられる。成員が個体成員の場合をタイプB1、属性成員の場合をタイプB2、サブカテゴリーの場合をタイプB3とする。

3.2.1 タイプB1とタイプB3: [個体成員] / [サブカテゴリー成員] から [ラベル] への推移

タイプBで代表的なものに、三宅(2011: 81-85)で述べる主要部同格型がある。NP2はcat Aのラベルで、NP1がどのカテゴリーに属するかを示している。(13a-f)では、NP1が個体成員を表しているためタイプB1、(13g, h)ではNP1がサブカテゴリーを表しているためタイプB3になる。

- (13) a. 東京の町, 大阪の町, 神戸の町, …, b. 日本の国, 漢の国, 唐の国, 摂津の国, 尾張の国, …,
c. 日の丸の旗, d. 君が代の歌, 赤とんぼの歌, 夕焼けこやけの歌, …, e. 富士の山…, f. クリスマスの日, イースターの日, …, g. チューリップの花, バラの花, スミレの花, …, h. 松の木, 杉の木, 銀杏の木, …, (三宅 2011: 81-85)

(13)のような例で、NP2にラベルが現れるにはいくつか理由がある。一つは、NP1が何を指すか曖昧な場合である。たとえば、バラだけであれば、苗なのか、木なのか、花なのか曖昧である。そのためカテゴリーを明示するために、NP2にラベルを置く場合がある。二つめは、NP1がカテゴリーの典型例である場合に起こる。日の丸の旗、君が代の歌などでは、「旗と言え」「歌と言え」といふ具合に、NP1が典型的な成員であることを示している。そのため、三宅も述べているが、*ユニオンジャックの旗とか、*〈最近の流行曲〉+の歌という表現は認められない。三つめに、属性を際立たせる効果がある。日本の国、誕生日の日のように、NP1がNP2の属性をもっていることを強調する。ラベルで属性を表すことに矛盾を感じるかもしれないが、何かのカテゴリーに属することは、そのカテゴリーの典型的属性を持つことをそのまま意味する。日本が国としての属性を持っていることを強調しているのであり、誕生日というのが日であることを強調している。この第3の理由にあてはまる例を追加したい。(14)は三宅が主要部同格型を応用した例と述べるものである。社会的弱者になりがちな〈障がい者〉の属性の中から、「人」をNP2におくことで、「人」としての属性を強調し、敬意を示した表現になっている。ここでは障がい者も、人の属性を持つ〈人〉であり、人として敬意を払われる対象であることを強調している。

- (14) 障がい者の人 (三宅 2011: 85)

3.2.2 タイプB2：[属性成員] から [ラベル] への推移

(15)のような例では、NP1がNP2の属性を表している。NP1の一個70円、230g、長さ3.6mというのはすべてNP2の属性であり、それら属性に焦点があたり、それらが強調された表現になっている。ここでは属性成員(NP1)が参照点となり、ラベルへと推移している。

(15) 一個70円のコロッケ、230gの挽肉、長さ3.6mのブロック塀、…

また住んでいる場所などがNP1に来て、NP2に人がくる(16)のような例もタイプB2に含まれる。NP2の人の属性である〈住所〉に焦点があたり、それが参照点となり特定の個人にたどり着く。これは人を弁別するとき、住所が有効な属性であるため、参照点となる例になる。

(16) 神戸のおじさん、巣鴨のおば、東京の坂田、…

次に三宅(2011)では主要部同格型でないとした(17)も、タイプB2になる。三宅は主要部後置型としているが、(13)と同様に、焦点はNP1にあると考えられる。つまりNP1である属性を強調する表現になっている。東京の〈首都〉という属性を、鳥さんの〈課長〉という属性を強調しているのである。これら属性は東京や鳥さんの成員の一つであるためタイプB2に含まれる。

(17) 首都の東京、課長の鳥さん、… (三宅 2011: 83)

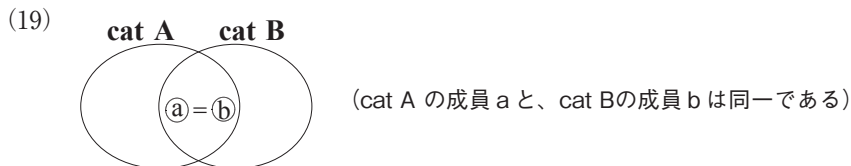
さらにタイプB2には、NP1に数量等の具対的な値がくるものもある。このNP1は、数量Q(奥津 1983の用語)と言われるもので、主要部のものの数や量を表す数量詞になる。

(18) 3台の車、8人の学生、5本のびん、1リットルの酒、3匹の子豚 (西山 2003: 27)

これは2段構えで考えなければならない。「3台の車」を例にとれば、まず車というカテゴリの中から、3台取り出した部分カテゴリを想定する。その部分カテゴリの台数という属性が、〈3台〉になっている。このとき、NP2の車は想定された部分カテゴリであり、NP1の〈3台〉はその部分カテゴリの属性になる。そのためタイプB2に入ると考えられる。

4. 複数カテゴリ推移 (Plural Category Shift)

複数カテゴリ推移の場合、2つのカテゴリでの推移が原則となる。基本構造は(19)になる。



「NP1のNP2」では、NP1とNP2は何らかの関連を持つ。単一カテゴリ推移では、ラベルと成員という関係であった。複数カテゴリでは、異なるカテゴリ間で関連を持つとはどういうことかが問題となる。本稿では、それは成員の同一化と考える。つまり複数カテゴリが関係を持つということは、互いの成員の中で同一化されるものがあると考えていく。属性成員であれ、個体成員であれ、何か共通するものを持つということが、cat Aとcat Bが関連を持つと考える。同一化する成員がなければ、2つのカテゴリは関係がない。

この複合カテゴリー推移での分類には、変項を含むかどうかという基準を用いる。本稿で用いる変項とは、名詞において値が指定されていない成員(x)を指す。変項(x)は、もう一つのカテゴリーの成員(値)によって充足され、意味が完結する(次節以降で、具体例を示していく)。変項があるタイプをタイプC、変項がないものをタイプDと分類していく。

さらに単一カテゴリー推移と同様に、成員の種類によって細分していく。成員は同一化で関わってくるので、個体成員の同一化か、属性成員の同一化で細分される。ただし成員がサブカテゴリーで同一化されることはない。というのもサブカテゴリーと認識するためには親カテゴリーが必要である。しかし複数カテゴリーは、互いに包摂関係にない。そのため別のカテゴリーのサブカテゴリーになっているかもしれないが、「NP1のNP2」で現れるカテゴリーは対等な関係にある。そのため複合カテゴリー推移の場合、タイプCもタイプDも、個体成員の同一化と属性成員の同一化の2つしかない。ここで確認しておきたいことがある。それはNP1とNP2は必ずしも、成員aと成員bという訳ではない。ラベルであることも、成員であることもある。以下タイプごとに見ていく。

4.1 タイプC：変項を含む複合カテゴリー推移

複合カテゴリー推移で変項を含むタイプCを見ていく。この場合、同一化される成員の一つが変項になる。ラベルが変項になることはない。同一化される成員は2つあるので、タイプCも2つに分けられる。一つは第2カテゴリー(NP2側)に変項があるタイプで、タイプC1と呼ぶ。もう一つは第1カテゴリー(NP1側)に変項があるタイプで、タイプC2と呼ぶことにする。このときこの分類がそのまま、個体成員の同一化と、属性成員の同一化の分類になる。すなわちタイプC1が個体成員の同一化のタイプになり、タイプC2が属性成員の同一化になる。以下これを順に見ていく。

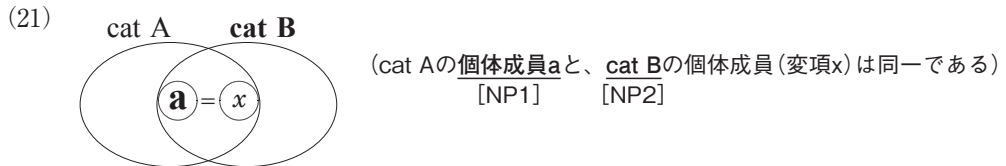
4.1.1 タイプC1：個体成員の同一化(category Bに変項(x)があるタイプ)

cat Bに変項が含まれるタイプC1を見ていく。また同時に、それらC1タイプが、個体成員同士で同一化になっていることを見ていく。まず代表的なものとして、西山(2003)の非飽和名詞におけるパラメータの値がある。西山は、主役、優勝者、上司、創立者、作者、研究者、幹部、相手、表紙などの名詞は、単独で外延を定めることができず、意味的に充足されていない名詞(非飽和名詞)だと論じている。そしてこれらにあるパラメータの値(X)が満たされなければならない、その値が定まらない限り、意味として完結しないとす(西山 2003 : 33-34)。

(20) a. この芝居の主役, b. 第14回ショパン・コンクールの優勝者, c. 太郎の上司, d. この大学の創立者, e. 『源氏物語』の作者, f. 生成文法理論の研究者, g. 自由民主党の幹部, h. 洋子の相手
(西山 2003 : 33)

本稿ではこれらは(21)の構造を持つと考える。焦点は、cat Aの成員 a (NP1)と、cat Bのラベル(NP2)に当たり、成員 a からcat Bのラベルへと焦点推移する。成員 a と変項(x)が同一化され

ることで、変項(x)の値が満たされる。変項(x)の種類は、各NP2によって固定しており、その値がNP1となる。例えば、(20c)「太郎の上司」では、cat Aの<成員：太郎>が、<cat B：上司>の<変項x：誰の>と同一視される。このことにより、変項は意味的に充足される。(20)のような例では、複数の解釈がうまれることはない。というのも変項(x)が何か決まっているからである。ちなみにcat Aは、値の候補となる成員の集合体になる。



またタイプC1には、NP1との関係をNP2が表すものも含まれる。(22)はNP2に入るものの例になる。例えば「家の外」のように、NP1には基準点となるものが現れ、NP2に関係を表す語が入る。(22a)では「机の前」など空間を、(22b)では「その日の翌日」など時間を、(22c)では「概念の外延」などその他の基準点を表すNP2の例が列挙されている。ここでの変項(x)は、NP2の意味に応じて関係を表すように構造化されており、その一部である変項部分が同一化される。これらも(20)のように、関係が固定しており、複数解釈が起こる余地はない。

- (22) a. 前、後ろ、左、右、上、下、中、外、内側、外側、そば、向こう、…
 b. 前、後、翌日、前日、翌年、前年、翌々年、…
 c. 外延、内包、圏外、圏内、…

この関係を表す語は、NP1とNP2を入れ替えることができる場合がある。例えば「2012年の翌年」は「翌年の2012年」と入れ替えることができる。しかしこの2つは意味が全く異なる。前者は(翌年=2013年)となり、後者は(翌年=2012年)になっている。つまり前者はタイプC1で2012年が基準年となっており、後者はタイプBで2012年の属性の一つ[翌年]がNP1に現れる形をとっている。

またNP1の数量・性質等を表す語が、NP2にくるものも、このタイプに入る。島津他(1986)がケース3としたものである。「太郎の身長」など、NP1の性質・属性を表す語を(23)で、「商品の種類」など、集合体NP1の数量等を表す語を(24)にあげている((23)(24)は島津他(1986:249))。これらが「NP1のNP2」のNP2の位置に現れる。これらもまた cat Bに変項があり、その変項を充足しているのがNP1になっている。

(23) 「重さ」、「長さ」、「大きさ」、「面積」、「体積」、「場所」、「形」、「色」、「かおり」、「名」、「名称」、「略号」、「年齢」、「機能」、「役目」、「速さ」、「性能」、「能力」、「速さ」等

(24) 「個数」、「種類」、「選択」、「平均」、「平均値」等

さらに親族関係を表すものも、このタイプC1に属する。これらも関係概念の一つと考えられる。

(25) さとこの父、さとこの母、さとこの姉/妹/兄/弟/おじさん/おばさん/祖父/祖母、等
 親族語のカテゴリー内に成員として変項(x)があり、それがcat Aの個体成員と同一化される。

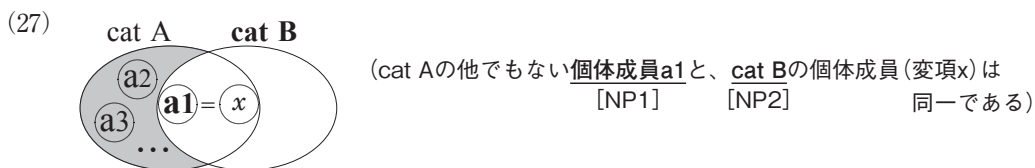
また非飽和名詞だけでなく、飽和名詞であっても、変項を持つ場合と持たない場合がある。まず飽和名詞で変項があるものに、西山(2003)の〈NP1〉と関係Rを有する〈NP2〉タイプがある。

例を挙げると、(26)のような例がある。

(26) 私の本、東北の芸人、3階の居酒屋、サッカーのベッカム、…

例えば「私の本」では、本の所有者という属性が変項(x)になっており、その値をcat Aの成員(私)が満たす構造になっている。しかし何の属性が変項になるかは定まっていないので、所有の意味に限らず、「私を書いた本」「私のことが書いてある本」「私に配布される本」など複数の解釈が生じる。

また(21)と基本同じであるが、cat Aの他属性との対比の意味が強くなるものもある。例えば、「私の本」で、誰の本かといえば、他でもなく私の本であることを意味したとする(〈私の〉を強く読むとこの意味)。この場合、他者との比較がある。「私の」と特定することで排他的な意味が生じる。このときの構造は(27)のようになっている。(21)と異なり、(27)ではcat Aで同一化されない成員(a2, a3, …)が見える形で背景化されている。

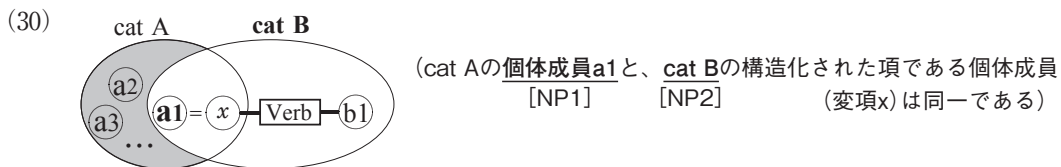


さらに本稿では、西山(2003)では異なるタイプに分類していた〈行為名詞(句)NP2と項NP1〉もここに含める。(28)では「NP1をNP2する」、(29)では「NP1がNP2する」という表現と置き換えが可能な表現になる。つまり(28)ではNP1が、NP2+スルの内項(目的語)に、(29)ではNP1が、NP2+スルの外項(主語)になっている(例は西山 2013: 40-41)。

(28) a. 物理学の研究, b. この町の破壊, c. パスポートの紛失, d. 軍隊の放棄, e. 夜間外出の禁止,
f. 助手の採用, g. この事件の調査, h. 被害者の救助, i. 予算の削減

(29) a. 田中教授の指摘, b. ミニスカートの流行, c. 洋子の到着, d. 貴乃花の引退

こうした(28)(29)のような表現は、(30)のような構造を持つと考える。焦点は同一化されるcat Aの成員(a1)と、cat Bのラベル(NP2: 行為名詞)にあたる。cat Bでは、成員の動詞とその項が、構造体をなしている。その構造体の一つの項が変項(x)となり、cat Aの成員a1と同一化される。cat Aは、値になる可能性のあるものの集合体になる。(20)のような非飽和名詞との大きな違いは、同一化される変項が構造化されていることにある。また対比の意味合いがあるので、(27)のように同一化されない成員(a2, a3, …)を書き入れている。

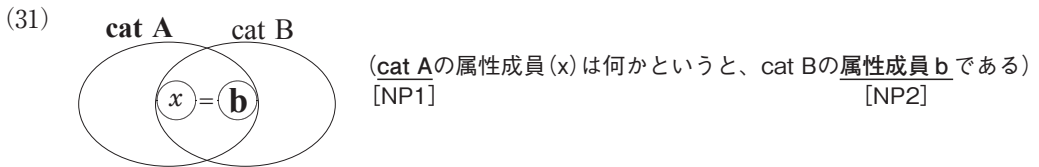


なお義務的な項が変項(x)になるため、自動詞の場合は変項(x)は固定され、複数解釈の可能性はないが、2つ以上の項をとる他動詞の場合は、複数解釈の可能性が出てくる。ただし他動詞であっても、選択制限から「財布の紛失」(内項)のように決まる場合もある。〈財布〉は人ではな

いので、動作主になることがないからである。類例として「心理学の研究」(内項)、「加藤教授の研究」(外項)のような場合であっても、解釈が固定されてくる。

4.1.2 タイプC2：属性成員の同一化(category Aに変項(x)があるタイプ)

今度はcat Bではなくcat Aに変項(x)があるタイプを見ていく。このタイプC2では、属性成員の同一化となる。ここでは(31)で示すように、cat Aのラベル(NP1)とcat Bの成員b(NP2)に焦点があたる。cat Aの成員に変項(x)があり、これが値となる成員bと同一化される。この例として(32)のような鈴木(2002)の変化型がある。



- (32) a. カーブのすっぽぬけ(が打者の頭部を襲った), b. フォークの落ちそこない(を軽々とスタンドへ運ばれてしまった), c. さんまのみりん干し, d. 牛肉のアスパラガス巻き, e. すっぽんのわさびあへ(列仙伝, 洒落本大成第3巻 p.215下) (鈴木 2002: 39)

しかし(32)は鈴木が言うように、コンテキストによって解釈が異なる。例えば(32c)でいえば、① サンマのx(サンマの塩焼き, サンマの煮付け, …), ② xのみりん干し(サワラのみりん干し, …), ③ x(干物のひとつとして。サバの文化干し, アジのひらき, …)の三通りの意味が考えられると述べている(鈴木 2002: 39)。ここでいうタイプC2の解釈は、①になる。(32a)の「カーブのすっぽぬけ」で言えば、cat AのラベルがNP1の「カーブ」であり、その属性の一つ(すっぽぬけている状態)が何かということ、cat B(候補の選択肢の集合体)の成員b1(すっぽぬけ)であるとなっている。つまりカーブの状態は何かということ、すっぽぬけであると述べている。それ以外の解釈はタイプC2にはならない。②はタイプC1であるし、③は単一カテゴリーのラベル(干物)の成員ということを述べているのでここでの議論とは関係がない。

4.2 タイプD：変項を含まない複合カテゴリー推移

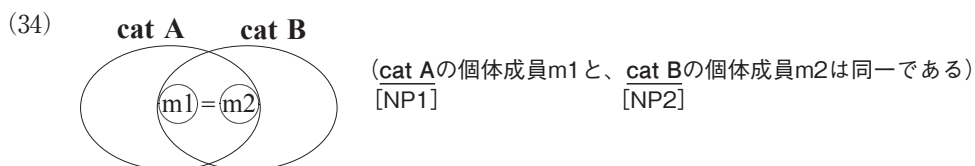
変項を含まない複合カテゴリー推移は、NP1に、NP2を記述する語が入る。この場合も、同一化される成員が、個体成員か属性成員かで大きく2つに分けられる。個体成員が同一化される場合、タイプD1とする。そして属性成員が同一化される場合を、タイプD2とする。以下順に各タイプを見る。

4.2.1 タイプD1：変項(x)がなく個体成員が同一化されるタイプ

まず個体成員が同一化されるタイプD1を見ていく。これには(33)のような例があり、(34)の構造をしている。cat Aのラベル(NP1)とcat Bのラベル(NP2)に焦点があたり、互いの個体成員が同一化される。これらは表現対象が、2つのカテゴリーに属していることを示している。例え

ば(33a)ではコレラ患者(cat A)に属するm1と、大学生(cat B)に属するm2が同一成員であることを示している*4。cat Aのラベルとcat Bのラベルが焦点化されるので、これらが言語化される。

(33) a. コレラ患者の大学生, b. ピアニストの政治家 (西山 2003: 19)



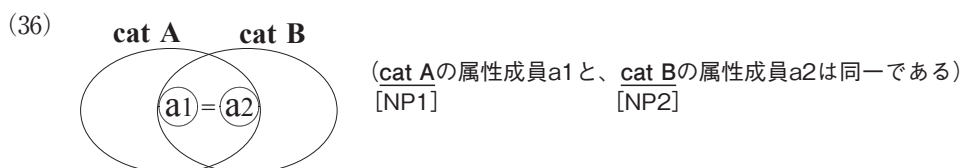
2つのカテゴリーに属することを述べているため、(33)は(35)のように、NP1とNP2を入れ替えた表現も可能である。

(35) a. 大学生のコレラ患者, b. 政治家のピアニスト

しかし順番を入れ替えることは、意味が異なってくる。「NP1のNP2」にははっきりとした方向性がある。NP1が参照点となり、NP2にたどり着くという方向性である。参照点となるには、その状況でNP1の方が、NP2より目立つ存在であることを意味する。(33a)ではコレラ患者が、(35a)では大学生が、より目立つ情報となっており、主要部であるNP2に推移している。そのため客観的には同じであっても、主観的には入れ替えた表現は異なる意味だと考える。

4. 2. 2 タイプD2: 変項(x)がなく属性成員が同一化されるタイプ

次に属性成員が同一化されるタイプD2を見る。これは両ラベル(NP1とNP2)に焦点があたるが、属性成員が同一化されるタイプになる。cat Aのラベルが参照点(NP1)となり、cat Bのラベル(NP2)へと焦点が推移する。このタイプもまた、NP1がNP2を叙述する。これを示したものが(36)である。



これには(37)にあげるような例がある。これらはcat Aのラベル(NP1)とcat Bのラベル(NP2)の属性が同一化されている。「赤の服」で言えば、赤が持つ色の属性(a1)と服が持つ色の属性(a2)が同一であると認識され、属性を表す表現がNP1に現れている。

(37) 赤の服、政治の話、四角の顔、皮のハンドバック、中国の問題、大盛りの牛丼、…

また(38)のように、程度の属性が一致する例がある。例えば「感動の作品」では、感動と感じるレベルの属性(a1)と作品が持つレベルの属性(a2)が同じであると見なされている。NP1は、レベルが同じと見なされる表現であれば、何にでも置き換えることができる。そのため属性とは異なる。

(38) 感動の作品、本物の技、異例の人事、驚異のジャンプ力、迫真の演技、…

ここでもNP1とNP2の順番を入れ替えると、認められないか、意味が変わる。(39)のように入

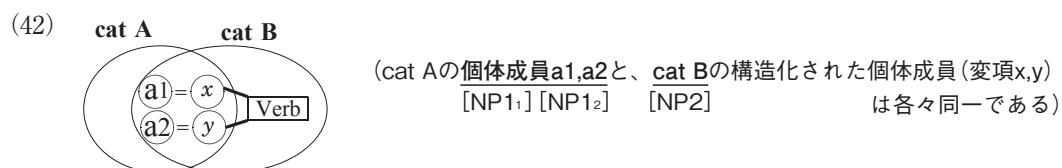
れ替えることができる場合、タイプA2になる。つまりNP1(ラベル)の属性成員が、NP2になる解釈である。一方入れ替えることができない(40)のような例は、卓越性の違いにあると思われる。より特殊性、個別性の高いものが、参照点となりやすい。例えば「政治の話」の場合では、政治の方が特殊性が高いために卓越性が高く、話が参照点として働かえないため、入れ替えることができない。

- (39) 服の赤、人事の異例(さ)、他 (40) *話の政治、*顔の四角、他
 2つのカテゴリーがただ並列しているかのように見えるが、実際はそこには、参照点と推移先という方向性がある。

5. 「NP1の」の多重共起

「NP1の」が複数現れることがある。まずは変項が2つ以上現れる場合で、(41)のような例がある。(41a)で言えば、2つの項(主語と目的語)が「NPの」で併記されている。このときの構造は(42)になる。項の値として選択可能な成員のゆるやかな集合体(cat A)の中から、動詞の項の変項(x, y)と同一化されるものが選ばれ、結びつけられる。

- (41) a. 寺村の日本語学の研究(←寺村が日本語学を研究する)
 b. 戦闘機の都市の破壊(← 戦闘機が都市を破壊する)



現れる項は2つとは限らない。次のように直接目的語と間接目的語が同時に現れたり、着点などが現れることもある。この場合、直接目的語と着点には、助詞の「へ」が必要になる。これがないと解釈がなりたたない。そのため項の種類によっては、「の」だけでは許されないものもある。

- (43) a. 私の彼へのケーキのプレゼント(←私が彼にケーキをプレゼントする)
 b. アルバイトの客席への食器の配置(←アルバイトが客席に食器を配置する)

これらの項が現れる順番には、ある程度の規則性がある。主語>直接目的語>間接目的語>着点等の順になる。そのためこの順になっていない(44)のような例は不自然か、不適格になる。

- (44) a.??ケーキの彼への私のプレゼント b.*食器の客席へのアルバイトの配置

さらに(43)に、項でない「NPの」を追加することもできる。(45a)では「誕生日の」、(45b)では「赤の」が追記されている。

- (45) a. 私の彼への誕生日のケーキのプレゼント b. アルバイトの客席への赤の食器の配置

つまり異なるタイプの併記が可能ということになる。とはいえ動詞の項以外での、複数の「NPの」の多重共起には大きく2つに分けられる。一つは同一タイプでの多重共起がある。

- (46) a. 家の窓の枠の傷(タイプA) b. この芝居の主役の相手(タイプC1)

c. カーブのすっぽ抜けのぼてぼて(タイプC2) d. 長方形の皮のハンドバック(タイプD2)

これには(46a, b)のように順番が固定しているものと、(46c, d)では「カーブのぼてぼてのすっぽ抜け」「皮の長方形のハンドバック」のように順番が入れ替えられるものがある。

2つめは複数のタイプが混ざることがある。

(47) a. 家の檜のお風呂(タイプA+タイプD) b. クリスマスの日の翌日(タイプB+タイプC)

「NPの」が複合的に現れる場合、現れる順番に制約がかかることがある(cf. 森 1993)。つまり入れ替えができない場合がある。本稿では、NP1とNP2の順番における制約は、参照点としての卓越性に求めた。NP1はあくまで参照点であり、NP2より卓越性がなければならない。コンテキストが変わり、見方によって、NP2が卓越性を持つことができるのであれば、意味は変わるが入れ替えることができる。ここでも同じで、複数の「NPの」が併記されるのは、卓越性に違いがない場合か、卓越性を置き換えることが出来る場合に、入れ替えることができる。しかし前置される「NPの」が後置されるものより、卓越性をコンテキストを変えても持ち得なければ、入れ替えることができない。

しかしながら、異なるタイプの多重共起はかなりゆるやかで、属性成員と個性成員と成員の種類が異なっても、共起できる。これはカテゴリーの中には、個体成員と属性成員が共存しており、どちらかに焦点があたっているにすぎないからである。そのため異なるタイプの「NPの」が追記されても、そのたびにどちらかに焦点を当て直すだけにすぎないので共起できる。

6. まとめ

以上カテゴリーをもとに「NP1のNP2」の分類を行った。ここで行った分類を表にまとめたものが、(48)になる。まずカテゴリーの数によって分類した。一つであれば単一カテゴリー推移、複数あれば複数カテゴリー推移になる。単一カテゴリーの場合は、推移の向きによって、タイプAとタイプBに分類した。そして各々成員の種類によって3種類に細分した。複数カテゴリー推移の場合、変項があるかないかでタイプCとタイプDに分類した。そして同一化される成員の種類に応じて、各々2種類に細分した。つまりこの分類は、カテゴリー、変項、成員の3つの観点から分類されている。また「NPの」が複数現れる場合の共起性を、5節で扱ったが、まだ十分と言えない。英語の of と属格との比較を含めて、今後の検討課題としたい。

(48)

		NP1	NP2	成員		
単一カテゴリー推移	タイプA	ラベル	→	成員	タイプA1	個体成員
					タイプA2	属性成員
					タイプA3	サブカテゴリー
	タイプB	成員	→	ラベル	タイプB1	個体成員
					タイプB2	属性成員
					タイプB3	サブカテゴリー
複合カテゴリー推移	タイプC (変項あり)	cat Aの成員	→	cat Bのラベル	タイプC1	個体成員 (cat Bに変項)
					cat Aのラベル	→
	タイプD (変項なし)	cat Aのラベル	→	cat Bのラベル	タイプD1	個体成員
					タイプD2	属性成員

注

- * 1 正確には、一つのカテゴリーに、混在した形で個体成員と属性成員が存在する。しかしスイッチの切り替えのように、視点が個体成員か属性成員のどちらかに切り替わると考える。ただし一つの操作には、どちらか一つのみが関わると考える。
- * 2 そのためNP1とNP2を単純に入れ替えた(i)のような例であっても、何が参照点になるかで異なるため、違う意味と見なされる。例：(i) a.シェークのパニラ b.パニラのシェーク
- * 3 鈴木(2002：41)では言挙げ型と述べている。
- * 4 西山は(33)のような例では、空所が存在するというが、本稿では空所はないと考える(西山 2003：20)。つまり変項は存在しない。

参考文献

- 三宅知宏. 2011. 「『主要部』の概念と“XのY”型名詞句」『日本語研究のインターフェイス』, 79-87. くろしお出版.
- 森捨信. 1993. 「日本語の『甲の乙』名詞－『甲の』の統語的二面性」『言語』22(8), 82-85. 大修館.
- 西山佑司. 2003. 『日本語名詞句の意味論と語用論：指示的名詞句と非指示的名詞句』ひつじ書房.
- 奥津敬一郎. 1983. 「数量詞移動再論」『人文学報』(160), 1-24.
- 島津明・内藤昭三・野村浩郷. 1986. 「助詞「の」が結ぶ名詞の意味関係の解析」『計量国語学』15(7) 247-266.
- 鈴木浩. 2002. 「日本語属格の周縁－意味上の主要部を後項に認めがたい型」『文芸研究』(88), 134-121.
- 寺村秀夫. 1991. 『日本語のシンタクスと意味 第3巻』くろしお出版.

(おがた たかふみ：英語学科 教授)

